

号	著書名	著者
創刊号	創刊にあたって	西節夫
	『愛人』における「絶対の映像」について—写真をめぐるディスクールとしての『愛人』—	芦川智一
	『新アフリカの印象』または極限のエクリチュール	北山研二
	Le discours sur l'acteur présenté dans la Lettre à M. D'Alembert de Jean-Jacque Rousseau	高瀬智子
	「現前の形而上学批判」とは何であったか	中村康裕
第2号	留学にいたるまで	高瀬智子
	フランス人と移民の間で与えられたアイデンティティと マグレブ系移民第二世代の自己主張	植村清加
	『新アフリカの印象』または極限のエクリチュール(2)	北山研二
第3号	詩人、政治家、ユゴー	池田佳織
	フランス・ロマン派と序文	池田佳織
	クリスティーン・アンゴと自伝フィクション	小室廉太
	「ヨーロッパ」という寓話—ミラン・クンデラをめぐって	安永愛
	ニーチェとファシスト—ドリュ・ラ・ロシエル「マルクスに抗するニーチェ」を巡って	吉澤英樹
	国家と略奪(1)—デュゲ=トルーアンの私掠行為とその役割	吉村知幸
	Ordre et désordre à l'époque Tokugawa au Japon --Théâtre de marionnettes de Chikamatsu--	高瀬智子
第4号	『留学』について—南仏・エクスとスイス・ジュネーブへの留学から—	小室廉太
	1年目の課題…フランス語！！	高瀬智子
	写真から言葉へ—ロラン・バルトとマン・レイを巡って—	木水千里
	Le dandysme dans le "Traité de la vie élégante"	小室廉太
第5号	L'écriture du trou dans le tout	Vincent Teixeira
	内的体験をめぐって(前)	吉田裕
	国家と略奪(2)—新大陸におけるスペインとイングランドの抗争—	吉村知幸
	エミール・ゾラ『獣人』における自然主義的態度の転回について—「観察」から「裁き」へ—	切敷大志
	ランボーとブルトン—changerlavie をめぐって—	高木一敏
	内的体験をめぐって II	吉田裕
	航海と情報—1568年サン・フワン・デ・ウルアの戦い—	吉村知幸
第6号	命名への意思—自伝、フィクション、自伝フィクション	小室廉太
	アルザスの風に吹かれて—1年間の交換留学を終えて—	目黒純子
	シャルル・バイイの言表行為理論における「私」の構造	江口祥光
	マルコ・ポーロ『世界の記述』における「ジバング」	片山幹生
	「芸術」であるための言説—同時代人によるマン・レイの写真についてのテキストとマン・レイ自身による写真についてのテキストを巡って—	木水千里
	恥をかく—エルノーのエクリチュールから—	小室廉太
差延を営む「シンタックス職人」—意味論的差延における諸条件について—	立花史	

	変革への意志と揺れるヴィジョン—表現主義と青年運動—	二階堂まち子
	内的体験をめぐるIII (最終回)	吉田裕
	マルグリット・デュラスと植民地—『愛人』と『フランス植民帝国』のあいだ—	芦川智一
	近年の英語圏でのバタイユ研究について	古永真一
	Un an à Seijô	Christophe Alonso
第7号	連鎖と交差—初期デリダ研究—	立花史
	ウージェーヌ・ドラクロワ《ユダヤの結婚式》におけるイメージとテキスト—画家のメモ、記事、『回想録』をめぐる—	古川法子
	『ボヴァリー夫人』における技術的能力の評価に関する一考察	中野茂
	テキストの生産と戦略—帰属戦争、テキストの翻訳、文芸の制度化	野呂康
	聖なるものと共同体—「アセファル」をめぐる (1936-1939)	吉田裕
	動画における静止と運動、そして間隙	深川一之
第8号	外を思考するもの(1)—マルセル・デュシャンの場合	北山研二
	詩集 Alcools の ZONE における時間軸	高木一敏
	『クレヴの奥方』におけるメランコリ	野村昌代
	雇われ検閲人は金を受け取ることができるか? —フランス近世出版統制とジャンセニスム	野呂康
	運動するイマージュのレアリテー眼と動くイマージュ	深川一之
	IMEC における調査の報告	芦川智一
第9号	境界の芸術家——マン・レイとモード写真——	木水千里
	〈虚構〉のための言語学——マラルメの「言語に関するノート」試論——	立花史
	公認か「承認」か——フランス近世出版統制とジャンセニストの出版戦略——	野呂康
	ドリュ・ラ・ロシェル『フランスの測定』における語り手の誕生 I) ——作品における人口減退論の思想史的意義について——	吉澤英樹
	過剰さとその行方——経済学・至高性・芸術 1) ——	吉田裕
	Auguste Brizeux et la chanson traditionnelle	Akihiko BETCHAKU
	幸福のイメージ——動画像の修辞学試稿——	深川一之
第10号	デュラス『愛人』の成立に関する一考察——IMEC 資料を中心に——	芦川智一
	ハンス・ベルメールにおける作品とその現実性について	弘島礼奈
	過剰さとその行方——経済学・至高性・芸術 2) ——	吉田裕
	純粹経験と現象学的経験——場の理論のための一考察——	小嶋洋介
	マラルメと「自然の悲劇」——『古代の神々』についての試論——	立花史
	ガブリエル・ヴィットコップ、死に魅せられた作家	野呂康
第11号	奥行と自然——「場」の理論のために(1):セザンヌから「山水」へ——	小嶋洋介
	ルネ・シャールにおける〈至高性〉をめぐる	神房美砂
	『ラストタンゴ・イン・パリ』——コミュニケーションの(不)可能性について——	弘島礼奈
	死と歴史をめぐる二重奏 I ——ヘーゲルを読むバタイユ——	吉田裕
第12号	芸術からアートへ:アートの公共性をめぐって	北山研二/吉田裕
	後期メルロ＝ポンティの思想におけるクロード・シモンの位相について	澤田哲生

	ルネ・シャール「ラスコー」における四つの詩—先史時代への まなざし—	神房美砂
	コンブレーの食堂とフランソワーズのビーフシチュー—プルー ストにおけるイメージとテキスト—	目黒純子
第 13 号	写真をめぐる自伝的作品または 2000 年代のアニー・エルノー	八木橋久実子
	道徳経験と相対主義—フレデリック・ローの道徳哲学—	伊東俊彦
	いかなるプティックスも、いかなる語もない—マラルメの「ソ ネ自体のアレゴリーのソネ」について—	野口修
	いかにして社会秩序において私の狂気を維持するか—アンジェ イ・ブラウスキーにおける「狂気」の表現について—	弘島礼奈
	身心問題の意味と無意味—メルロ=ポンティ・デカルト・レヴ ィナス—	村瀬鋼
	「人称」を巡る二つの理論—バンヴェニストとクルシル—	江口祥光
	ソシュールの未完の草稿の作成年代	川本暢
	大地と霊性—「場」の理論のために(2):ファン・ゴッホにおけ る〈大地〉—	小嶋洋介
第 14 号	動物性と怪物性—バルザック『従妹ベット』に見る登場人物の 変容—	沖久真鈴
	ソシュールとデュルケーム—言語と社会的事実—	高木敬生
	支持/指示体としてのストライプ—ミニマリズムとの比較によ るダニエル・ビュレン芸術—	中村泰士
	「原初の日」—マラルメの「花々」について—	野口修
	神秘哲学のパススペクティヴに向けて—「場」の理論のために (3):ファン・ゴッホにおける〈日本〉—	小嶋洋介
第 15 号	Transformation de la vue in situ en signe : le travail de Daniel Buren	Yasushi NAKAMURA
	言語の倦厭—マラルメの「苦い休息に倦み果て」の前半部につ いて—	野口修
	ソフィ・カルの自伝的美術作品について	松本良輔
	伝説の終わり?—バタイユと「刻み切りの刑」の写真—	吉田裕
第 16 号	バルザックにおける近代的視線——ラスティニャックとリュシ アンにみる視線の構造力学——	伊藤由利子
	バルザックにおける動物表現——『谷間の百合』と『ゴリオ爺 さん』における鳥の表現——	沖久真鈴
	空の椅子——絵画性の探求者としてのゴッホ——	諏訪有紀
	Le support de la vue et le dispositif du jeu et de la réflexion :	中村 泰士
	マラルメの「芸術の異端——万人のための芸術」と言語共同体	野口修
死者の二つの送り方バタイユとマルロー	吉田裕	